「リニューアル開館記念
女性美の極致 上村松園」展

2004年4月14日［水］－ 5月23日［日］

日本近代を代表する美人画家・上村松園は、明治８年に京都・四条御幸町のちきり屋という葉茶屋に生まれました。にぎやかな四条通りで、江戸時代の面影を色濃くのこす風俗や女性たちにふれて育った松園は、店に出入りする客を熱心に画帖に写すなどして幼少の頃から画才を発揮していたといいます。女が絵を習うなどとんでもない、という時代に、母親の深い愛情と理解に支えられた松園は、京都府画学校に入学後鈴木松年に入門、十代半ばから作品を発表して注目を集めました。その後も、幸野楳嶺・竹内栖鳳に学び研鑽を重ね、美人画家としての地位を確立します。

松園は、歴史や古典文学、謡曲などに登場する理知的な女性を画題とする一方で、江戸時代半ばから幕末にかけての女性風俗や、自身が幼いころ京の町中で接した前時代の名残をのこす明治の女性たちも数多くとりあげています。「私はたいてい女性の絵ばかり描いている。しかし、女性は美しければよい、という気持ちで描いたことは一度もない。」と松園自身が述べているように、松園の描く女性像はいずれも気品に満ちており、松園ののこした「真・善・美の極致に達した本格的な美人画」は今なおわたしたちを魅了し続けています。

松園の画業と生涯は、近代京都の日本画界における伝統的要素のあり方、「女性像」の近代以降の展開、近代社会における女性画家のあり方など重要な問題をわたしたちに提起しています。県立美術館のリニューアル開館を記念して開催する本展では、代表作約80点と大下絵を通じて不世出の女性画家・上村松園に迫ります。「一点の卑俗なところもなく、清澄な感じのする香り高い珠玉のような絵」を理想とした松園芸術に触れるまたとない機会になるでしょう。(Mm)

《母子》 昭和9（1934）年　東京国立近代美術館所蔵

《序の舞》昭和11（1936）年　東京藝術大学所蔵（4月14日～5月5日展示予定）